

## NPO 活動の原動力とその背景

特定非営利活動法人「わくわく体験隊」理事長  
杵本幸司

このエッセイが本誌の性格や目的に沿うものになるかどうかはわかりませんが、今まで、あまり世間の声や杵にとらわれず「真っ当な異端児」として経験、実践してきたことや感じたことを書かせていただき、そこから私の NPO 活動の原動力とその背景が伝われば幸いです。

### 「わくわく体験隊」の設立経緯

2002 年、愛知万博の工事のため愛知青少年公園の閉鎖となり、学生キャンプカウンセラー団体「まつぼっくり会」はそのキャンプ場で子どもたちのための活動ができなくなった。しばらくの間、小中学校の依頼キャンプを中心に活動したが、学生でもあるキャンプカウンセラーにとって、大半を占める平日の依頼は、学業との両立が難しく 31 年の歴史に幕が降りた。しかし、現役学生の中には 31 年間蓄積されたものを継承していきたい気持ちを持った者が何人かおり、NPO 法人として活動していこうという私の考えに賛同してくれ設立準備に取りかかった。

時をほとんど同じくしてある事件が起こった。2002 年 10 月 5 日、県立児童自立支援施設「愛知学園」の事件に仲間が巻き込まれたのも偶然とは思えなかった。その悲しみをエネルギーに変え、11 月に設立総会を行い県への認証申請、そして翌年 3 月 20 日に認証され 4 月

より活動を始めた。

### 「わくわく体験隊」の活動目的

子どもたちの主体性を大切にした体験活動を企画・運営し、「生きる力」を育み、自然環境の大切さを学ぶことにより子どもの健全育成を図るとともに、この活動の推進役である青少年の育成をすすめることを目的にしている。特に人格を形成するのに関して大きな部分を構成する子ども時代の「原体験」を意識した体験活動を展開している。また、その活動の中で子どもたちの感性を否定せずのばすように心掛けている。

### 「原体験」とは

我々が考えている原体験とは、自然の中に存在するものを五感（五官）で感じる体



キャンプカウンセラー

験を基礎として、そこから好奇心や向上心を育み、人間関係の構築ができるコミュニケーションの取り方を試行錯誤で学び、そして恐怖感や挫折感又は達成感を感じさせることで次のステップへつなげることが可能であり人格を形成することにも影響をあたえることができる体験である。

具体的には、火、石、土、水、植物、動物（昆虫）などをうまく組み合わせた体験活動で遊びながらもサイエンス、芸術、体育、文学、歴史などを意識しながら展開している。

## 脱サラ

1991年、32歳の時、9年間勤めた会社をやめ、アウトドアショップを開業する。サラリーマン時代はサーボモーターという産業用ロボットとか工作機械などに使われる制御用モーターとそのコントローラーを製造する従業員2000名の上場メーカーで営業として働いていた。

大学は工学部電子工学科を卒業していたが、机に向かうことが嫌いな私は、営業を第一希望として入社。当初は品質管理に放り込まれた。入社時、技術が設計並みに理解できる営業マンを目指したいと啖呵を切ったところ、当時の副社長がその願いを聞き入れてくれたようだ。

第2次オイルショックから立ち直りバブル時代へ一気に加速するころであった。新宿歌舞伎町にディスコが初めてできたのもその頃であった。工場には3年程度いる予定が営業所の人手不足もあり急遽、半年で地元名古屋営業所にUターン転勤となった。尾張エリアには大手企業があり、日本でも有数の大手企業の担当を任された。

会社のトップの思惑通り、世界のトップ企業の技術者から最先端の技術やノウハウを勉強させていただきすくすく成長した。

その技術屋さんからも技術がわかる営業マン、破天荒な営業マンとして可愛がられるようになっていった。そして入社5年目となった頃には、副社長が社長になり、また取引相手が大手企業ということもあり、大きな商談がバンバン決まっていくという恵まれた環境となっていた。サラリーマン生涯のうちに1度頂けるかどうかという「社長賞」を9年間の間に2度受賞した。

20代の若造が社長とホットラインを持ち、やりたい放題で個人プレーをしているのだからまわりから圧力がかかるのに時間はかからなかった。「出る杭は打たれる」である。名古屋営業所所長では私を押さえることができないと幹部が判断すると、私の目付役に本社の部長が単身赴任してきた。「組織への歯車化作戦」の開始である。

私が仕事の中で一番好きだったのは、その企業のトップ技術者と世界一とか業界一を目指す仕事であった。私への「歯車化作戦」では、その楽しみを奪い、沢山の部下をつけて人とお金の管理をさせようとしてきた。再三、肩書きなんていらぬから前と同じ仕事をライフワークにしたいと部長に申し入れたが聞いてはもらえなかった。

そして、会社を辞める決定的なことが起きた。それは、私を金沢営業所の所長にするという人事が動き始めたことだ。部長からは、金沢の所長を3～5年やってもらう。その頃には名古屋営業所が支店となり、初代の支店長として就任する流れで進めるという話がされた。他の方から見れば良い話ではないかと思われるに違いない。しかし私にとっては苦痛でしかない話なのだ。

まず、「金沢」がいけない。学生時代、車の屋根に自転車を積んでキャンプをしながら能登半島一周の旅行にでかけた。その時、兼六園近くの喫茶店に入ったときのことであった。自転車を積んでいることを忘れ、そのガレージに車を入れた途端悲劇が起

こった。車の天井はへこみ、ガレージの天井には自転車のタイヤの跡がせせら笑うようにしっかりとついている。それ以来、「金沢」は私にとっては鬼門であるとすり込まれてしまった。

その後、仕事で何度も金沢に行くことがあったが、いつも冬であった。その学生時代のトラウマのせいもあり、低く暗い雲が垂れ込める空の下、そこにいるだけで肩が凝るのであった。そして、ここには住めないなど行く度に感じていた。

また、自分のこれからの人生に人がレールをひいてしまっているのも面白くなかった。そんな時にスキーで足の靭帯を痛め、治療とリハビリで3ヶ月というアクシデントが重なった。そんな幾つもの悪条件が重なって、ついに仲人もしていただいた部長に退職願を出すことになった。

## 大学時代

私は大学生時代（1978年～1982年）、愛知青少年公園キャンプ場のキャンプカウンセラー団体「まつぼっくり会」で活動していた。この活動の経験が現在の私の活動の大きな影響を与えていることは言うまでもない。「まつぼっくり会」は愛知県下の複数の大学の学生だけで構成されており自主的にトレーニングや研修を行い夏休みの40日間は24時間体制で子ども会等のキャンプの指導にあっていた。朝は5時30分には起床し、夜の反省会が終わり就寝するのは午前1時頃。起きている時間帯はほとんど炎天下で子ども達と過ごすという過酷な活動であった。

その活動の中で、CISV日本協会（世界子ども村）による世界の11歳の子ども達を集めてのキャンプや国際児童年にはアジアの国々の子ども達を集めたキャンプなども行われ、それに携われる機会にも恵まれた。

その当時は、政治・宗教・民族を乗り越えた「平和教育」と「異文化間交流」の促進を目的とされ、「多文化共生」の前段階の時代であったような気がする。

「まつぼっくり会」の中でヒマラヤを目指す山登りが好きな奴がいた。私も父親が登山好きで、小学2年の時富士山を登頂し、それ以降毎年3000mクラスの山に連れてもらっていたことから登山の趣味を共通とする友人となった。しばらくは一緒に山行したが、彼が日本山岳会東海支部に入会してからは、ほとんど単独で山に行くことが多くなった。

大学4年の時は、3年間で卒業単位数をほぼ取得し、必須科目である卒業研究1科目だけとなった。卒業研究室に行っても、仲間は卒業に必要な単位を取るため授業にでており自分一人だけの時が多かった。研究テーマが粘土から鉄分を磁力を使って回収するという「大勾配磁気分離」であり、担当教授に鉄分を取った粘土は焼いてみないとその効果が分からないということで説得し、電気炉を購入していただいた。それからは研究室に来ては陶芸を嗜むという優雅な卒業研究となった。教授も色々釉薬を購入してまんざらでもない様子であった。

もちろん、電子工学科である以上、電気炉のワンボードマイコンによる制御も暇つぶしに行った。プラチナの熱電対を電気炉に突っ込み、その電圧をA-D変換しワンボードマイコンに取り込み、演算し、その結果をD-A変換し電気炉の電力制御を行うことで温度上昇のカーブを制御した。それにより、いつも同じ条件で焼くことができる電気炉としたのだ。

週に2～3日は研究室で陶芸を行い、その他の日はアルバイトと登山に明け暮れていた。もちろん夏休みはキャンプカウンセラーのチーフとして活動し、就職も会社訪問の時に内定となりそのまま就職、奨学金

はすべて自動車のガソリン代となっていた。そしてふと気がつけば卒業。そんな生活ができた恵まれた大学生時代であった。

## アウトドアショップの経営者

さて、脱サラしてアウトドアショップを経営しようと行動を開始する。何しろ、どうやって商品を仕入れるかも知らない。アウトドアグッズメーカーや商社に電話をして問屋さんを紹介してもらいところから始めなくてはいけない。そんな中、わたしの若さと考えに協力してくれる大阪の問屋と出会えた。その社長は、若い時、夏ではあったがアラスカのマッキンレーの登頂に成功している。それも初ルートだ。そして、その縁によって後で述べる「アラスカ物語」が生まれることになる。

商品を売るだけでなくハイキングや登山、カヌー試乗会などのイベントを行うことにも力を入れたかった。そのために、プロとしてのインストラクターになる必要を感じた。開業準備と並行しながらスクールに通ったり練習したりした。開業してからもお客と実際のフィールドに出てアウトドアライフを楽しんだ。

その当時は、カヌーやカヤック、XC スキー、マウンテンバイクなどの出始めの頃であった。フィールド情報はほとんどなく国土地理院の地形図を見ながら適した場所を探し下見に何度も足を運び最適ルートを探した。今となっては懐かしい思い出である。しかし、この経験が「子どものための体験活動」を安全に配慮した企画・運営する中で大変役にたったのは言うまでもない。

開業当時、中高年の方向けに中仙道の木曾路日帰りハイキングを2週間に1回、合計6回を尺取り虫方式で完歩するというものだ。これがきっかけとなり、そこに参加したメンバーは、その後、日帰り低山登山、

花の百名山登山、3000m クラスの北アルプス・南アルプスとランクアップしていった。そして2000年からは私が企画・手配・ガイドするスイスやカナディアンロッキーの海外トレッキングに参加し、とうとう海外トレッキングの虜にまでなってしまった。

## 運命的な「1996年」

1996年5月5日～11日、1967年冬季マッキンレー初登頂した隊に参加していた唯一の日本人「西前四郎氏」とアラスカに同行する機会に恵まれた。西前氏の今回のアラスカ訪問の目的は二つあった。

一つは、「冬のデナリ」（福音館書店発行）の最終校正のために、その隊のメンバーに、当時のことの確認し、その時の心情、現在はどういう思いがあるのかなどを訪ねてまわることであった。もう一つは、アンカレッジの郊外に12万坪の土地が売りに出された。自然保護の観点から開発される前に冬季マッキンレー登頂隊のメンバーを中心に買い取り、そこに60坪ほどのログハウスを建て、アラスカの自然を体験できる施設にしようとするのであった。

この旅の中で、西前氏の知人でもある世界的ネイチャーフォトグラファー「星野道夫」氏との出会いにも恵まれた。残念なことに、1996年8月8日星野氏はカムチャッカでTV撮影のガイド中、熊に襲われ死亡。同年10月10日西前氏は本の出版一月前、心臓発作で自宅にて急逝してしまった。

私にとって1996年は、「出会いと永遠の別れ」という忘れがたい年になってしまった。そしてこの出会いがその後いろんな形で影響し多くの人との出会いと繋がりになるとは思いもよらなかった。そして、ここで出会った人たちから多くのことを学んだ。いつかチャンスがあれば、この大自然と人の繋がりを感じてもらうような活動が

行えないかという漠然とした思いが。私をそんな気持ちにさせた「アラスカ物語」を紹介したい。

## アラスカ物語

この物語は1本の電話から始まった。取引先の間屋の社長からだった。社長が若い頃に入っていた山岳会「関西登高会」で、一緒にマッキンレーに登った「西前さん」がアラスカに行く、社長の奥さんも参加するし、ハードな旅行になるので若い私に同行して欲しいと依頼された。社長には、開業以来いろいろお世話になっているので断れずに行くことにした。

関西空港の指定された場所に行くと、そこには、ハンティング帽をかぶりオレンジのスコッチタイをした、眼光鋭い小柄な老紳士がいた。電話では話していたが初対面である。挨拶すると、鋭い眼光が急に柔和になり握手を求められた。

まずは、ノースウエスト機でシアトルに向かい、カナダ国境付近のサンファンアイランドにあるロペッツ島に向かう。そこには、冬季マッキンレーの初登頂をした時の隊長グレッグが住んでいるのだ。現地時間AM9:20シアトル空港に到着。無事イミグレーションを通過して、さあ荷物を取りに行こうと思ったら、空港内を走っている地下鉄で2駅乗らなければならなかった。

荷物を受け取ると早々、レンタカーを借りて西前さんと同行する。予約しておいたレンタカーのカウンターで手続きをして、ミニバンを借りた。

「杵本君、君が一番若いから運転してくれないか？」と当然のように西前さんは言った。

「私は、左ハンドルも右側通行

も初めてだから…心配です…」と不安げに答えると

「ペーパードライバーに任せるよりましだろう？」

その一言を聞いた、とたん、私の今回の存在はパシリ役と確信した。

ルート3号線を北へ走る。爽やかな五月晴れ、新緑、咲き乱れる道路沿いの花々。なんて、感じる暇もなく私の頭の中は、「右側通行、ウインカーは左レバー、センターラインを意識しながら走ろう。」とエンドレステープのように繰り返し流れた。途中、マウント・ヴァーノンでタコスの昼食を取り、バーリントンから20号線を西に向かいアナコルテスのフェリーターミナルに向かう。午後3時到着。私の手と背中中は、緊張のせいで、汗がびっしょり。アナコルテスは骨董品を売るお店が多い。船で1時間も北に行けば、カナダに入ってしまう。

フェリーに乗って、サンファンアイランドの美しい島々と海を巡るように走り、40分。目的のロペッツ島に到着。サンファンアイランドは夏の間ホエールウォッチングの場所として有名で、シーカヤックのツアー会社も多い。ロペッツ島に着き、西前さんの「ちょっと怪しい記憶」をたどりながらのナビゲーションでグレッグの家に向かう。案の定、あと1マイル程の所を行ったり来たり。そこに、長男のザックがバイク



ロペッツ島

で探しに来てくれてなんとかたどり着く。

グレッグの家は、手作りのカントリーハウスで、庭に仕事用の小屋とサウナ小屋、アウトサイドトイレ、18万坪の牧場と自家用農園があった。グレッグは、アウトドア用ナイフ、地元ハイダ族が使う仮面やトーテンポールを彫る長斧や彫刻刀など作るナイフ鍛造職人として生計を立てていた。奥さんのアイリーン（インディアンネームはアイリス）は、父方がアラスカのクリンキット族で、母方がこの多島海のハイダ族の血を引く。息子ザックのインディアンネームはレイヴァン（ワタリガラス）、娘さんはムーンライト（月光）とついているそうだ。

アイリーンは、納屋にぶらさがっているシーカヤックを指さし、「自分一人で、一夏かけて、アラスカからカナダ沿岸を通りこの島までカヤック旅行を楽しんだのよ。」と、ちょっと照れくさそうに笑いながら言った。彼女にとっては、自分のルーツを辿るシーカヤックツーリングであったのだろう。

「私も、シーカヤックをやっています。そのツーリングに興味があります。」と言った一言が、その夜の長話になってしまった。アイリーンが話す英語の1/3程度しか理解できない私にとって、これは拷問以外の何物でもなかった。

今日は、メキシカン・デイ。初夏の到来を祝うパーティーがグレッグの家の庭で行われた。隣近所の十数家族が1～2品料理を持ち込んでのポットラック・パーティーとなった。そういえば、この島に来るフェリーの中でもダンス・パーティをしていた。

グレッグの音頭で50人あまりの人々が手をつないで大きな輪となった。

「いやあ、あらたまることもないんだけど。今年の夏に向けて、みんなの健康とぼくらの土地の繁栄を祈ろう。ほら、空を仰いで。

一日の最後の色をゆっくり楽しもうや。」

そして、「さあ、最後に、みんなでロケットと宇宙船地球号の平和な暮らしを祈ろう。」と簡潔に締めくくった。

その夜、私とアイリーンがカヤック談議をしている頃、西前さんとグレッグは、神秘的な顔をしながら、深刻な話をしているように見えた……。

## 冬のデナリ

グレッグは冬のデナリ（マッキンレー）を初登頂した5カ国から集まった8人の隊の隊長であった。冬のデナリを登頂して生きて帰った人数は、月に立った人数より少ない。氷点下50℃、風速50m、日照時間7時間、6000mの標高の酸素は平地の1/2という厳しい条件の中、今とは格段に劣っている装備で、1967年、初登頂に成功したのだ。

入山して3日目にフランス人のフェリー（ジャック・バトキン）がクレバスに落ちて死亡。アーサー、デイブ、ジェネの3人が、初登頂に成功するも、下山途中デナリパス（第4キャンプまで1時間の所）で7日間、ブリザードのためビバーク。食料、燃料切れの中、奇跡的に生還する。

第4キャンプにいたのは、グレッグ、ジョン、ジョージ、西前さんの4人。登頂隊が孤立してから3日目、グレッグとジョンは、救援を求めに、ブリザードの中、第3キャンプに向かって下山。6日目に第1キャンプに到着して、タッキーナの飛行基地に連絡がとれる。7日目登頂隊の下山姿を飛行機がとらえ、8日目第3キャンプ付近でヘリに救出される。西前さんとジョージは、第2キャンプで9日目に救出された。

後で聞いたのだが、グレッグと西前さんとのその晩の話とは、この遠征に対する30年間誰にも話せなかった「わだかまり」で

あったそうだ。それは、初登頂者には、「奇跡の生還」をなしとげたヒーローとして祭り上げられ、隊長には、「死にもの狂いで生き延びようとしていた登頂者を見捨てて下山した。」とか、「国民の税金をそんな道楽者の後始末に使うな。」というマスコミからのバッシング。特に登山界からバッシングがきつかったという。この遠征後、そんな世界から自らを隔離するかのよう、数年間ヨットでの生活をした後、このロペッツ島に落ち着いたという。

## オーロラ・リッジ計画

翌日、アンカレッジで貸し倉庫会社の社長をしている初登頂者の一人アーサー・デビットソンに会うため、シアトルからアラスカンエアーでアンカレッジに向かった。彼は、今回のオーロラ・リッジ計画（12万坪の土地を乱開発される前に購入して、そこに60坪程度のログハウスを造りアラスカの自然を楽しんでもらおうという計画）の主宰である。ユーピックの奥様と再婚し1歳の赤ちゃんがいる。なんと、前の奥様との息子には1歳の子どもがおり孫となる。彼は、環境保護活動家であり民族自立運動の活動も行っている。

翌朝、アーサーの経営している貸し倉庫



オーロラ・リッジ

会社に行く。8000坪の敷地に無数のガレージ風倉庫が建ち並んでいる。空きはほとんどなく商売繁盛しているらしい。こちらの家は日本よりも大きく、敷地も広いのに、貸しガレージが繁盛しているとは理解に苦しむ。従業員のレイチェルも連れ、ログハウスをたてる12万坪の土地のあるウイローに向かう。途中ワシラのスーパー「カーズ」で食料・ビールを買いだすため寄り道。アンカレッジより約1時間で到着する。

道ばたには、車にはねられたムースの死骸が横たわっていた。ウイロー川沿いの小径を踏み跡になるところまで、検分する。木々の芽がふきだしてまだ間もない。川沿いの日陰の所には、まだ雪が残っている。ムースの糞が、足の踏み場がないくらい散乱している。12万坪のどこに60坪のログハウスを建てるかアメリカ側と日本側で意見が対立。アメリカ側「景色がよく、できればマッキンレーが見える高台」、日本側「道路より近く、風雪を避けられるやや低地で平らな所」と言う具合に。結局アメリカ側意見を採用することになった。

## サンシャインの美人女将

今日の宿泊地サンシャイン B&B に向かい、その後、植村直己の最期の宿泊地、タッキーナのラティチュード62で夕食というスケジュールで話が決まる。サンシャイン B&B の手前でアクシデントが発生した。今日泊まるサンシャイン B&B は、西前さんが、アラスカに来る度に常宿としてのお気に入りの所らしい。

宿の手前3kmの所で、西前さんが近道を知っていると言うことで運転をかわった。舗装道路をしばらく走ったところ

で、脇のダート道にハンドルを切った。宿が、目の前に飛び込んできたその瞬間、見事にスタック。あせって、アクセルをふかしたものだから、ますます泥沼状態となり、脱出不可能に。宿まで50mのところ。宿から板を借りてきて脱出を試みてもうまく進めない。結局、近くに住む人の四駆の車にワイヤーで引っ張ってもらって脱出となる。50m進むのに、約1時間。「どこが、近道だ。」と参加者全員から非難を浴びせられ西前さんは意気消沈。西前さんの教え子でもある西岡さんと浜田さんは、ここぞとばかり先生であった西前さんに対して、面白おかしく昔話を持ち出しながらトドメをさした。



サンシャイン邸

男衆は、口には出さないが、宿の玄関から、時々心配そうに見ていた、ブロンドヘアでスタイル抜群の美女が気になっていた。西前さんがニヤリと笑い「美人だろう。この宿の女将のホップスさ。」男衆は、先程の非難の眼差しから、尊敬の眼差しに変わっていた。

この宿の主人トムは、20代でフィアデルフィアのホテルでコック長までなった料理人であったが、そのコック長をやめ、コンピューター関連を学ぶ大学を卒業して、コンピューターソフトエンジニアになった。恋いこがれたアラスカで暮らすための選択で

あったという。現在は、自宅でコンピューターソフトの仕事をしながら、宿を経営しているのだ。

女将のホップスは、ニューイングランド生まれの綺麗なブリティッシュイングリッシュを話す美女で、彼女が入れた紅茶は抜群にうまい。さっそく屋根裏部屋に通され、荷物を下ろす。母屋からちょっと離れた高台にあるサウナハウスの窓からは、マッキンレーの雄姿が見える。お風呂には、日本は富士山、アラスカはマッキンレーがつきものなのかな？

近くには、アラスカ鉄道のサンシャイン駅がある。駅といっても碎石が申し訳なさそうに盛ってある程度である。もちろん、改札も駅舎もない。電車に乗りたい場合、手を振って乗る意志を伝えないと止まってくれないらしい。

トラブルも乗り越えちょっと一息入れたところで、時計をみると午後9時30分。外は、まだ明るい。空腹も限界まできている。タッキーナの梅村直己最後の宿「ラティチュード62」に夕食に向かう。落ち着いたあるレストランで、直己の写真も飾ってあった。料理もなかなかの物。

今日も雲一つない快晴。遠くにマッキンレーの雄姿が見える。この晴天につられ朝5時から散歩に出かけ犬に吠えられ、追いかけることから一日が始まった。トムとホップスの心のこもったイングランド風ブレックファースト。やっぱり、ホップスの入れた紅茶は美味い。

## マッキンレーからフェアバンクスの星野道夫邸へ

マッキンレーの登山口タッキーナに向かう。昨日は夜だったのと空腹のために周りを見る余裕もなかった。今日は、正面にマッキンレーを見ながらのドライブで、つい

ついアクセルを踏み込んでしまう。タッキーナの空港でマッキンレー遊覧飛行を申し込む。K2 Aviationのセスナ機で1時間ちょっとの遊覧飛行。お一人様80ドル。

アラスカでは、山岳地帯や湿地帯に離着陸できるパイロットをブッシュパイロットと呼び尊敬されている。飲食関係はほとんどお店のおごりになるらしい。マッキンレーに向かって出発。未舗装の滑走路を跳ねながら助走し、無事離陸。正面にマッキンレー、眼下に湿地帯で水を飲むムースが見られる。20分位経過すると、いままでのどかな風景から一変して、荒々しいマッキンレーの渓谷に突入する。まるで、インディージョンズの世界だ。セスナの両側は断崖絶壁の崖が迫り、時折吹く横風に機体はスライドし、崖すれすれにもっていられる。正面にも絶壁が迫る。機体を急上昇させ回避する。

飛行機を降り、冬のマッキンレー登頂者の一人デイブ・ジョンストンの家に向かった。彼は州立デナリ公園のレインジャーをしている。彼の手造りの家にはアメリカのフォーク界の大御所がよく泊まりに来ているそうだ。残念ながら、道が雪解けでぬかるんでおり3km程手前で訪問を断念する。代わりに、タッキーナで教鞭を取る奥さんのキャリアに会いに小学校に向かう。西前さんが、キャリアと話をしている間、私たちは小学生と国際交流をしていた。午後1時、星野道夫氏に会いにフェアバンクスに向かった。デナリ国立公園の手前あたりから、ツンドラの風景になってきた。このあたりでは、夏でも地面を1m程掘れば氷がでてくるらしい。針葉樹の木々は、ある大きさになると倒木となる。それは、ツンドラ地帯であるため根がはれないからだ。そして、その倒木は朽ちて次ぎの世代の苗床とな



マッキンレー頂上

る。そんな景色を見ていると、なんだか切なくなってくる。その時は、あまり星野道夫さんのことを知らなかった。サラリーマン時代出張の時、アラスカでグリズリーの写真を撮っている日本人がいると紹介された週刊朝日の記事と写真が星野さんであったことがこの時わかったぐらいだ。アラスカのどこのビジターセンターにも、必ず「ムース」と「グリズリー」の写真集が販売されていた。

急に車の数が増え、人も多く見られるようになったと思ったら、フェアバンクスの街に入っていた。この街のスーパーの駐車に見たことがないものが立っていた。それも、車一台分のスペースごとに。どうも、そのポールから電源プラグが出ているようだ。何気なく止まっている車を見ると、ラジエター付近から、電源プラグが出ているではないか。後から聞いた話では、冬はエンジンを切って買い物している間にラジエターが凍ってしまうので、ラジエターにヒーターが付いているそうだ。そのヒーターに使う電源プラグが設置されているそうだ。

スーパーで夕食の買い物をしている間に、西前さんは星野さん宅に電話を入れて、大体の場所と住所を聞いていた。一抹の不安を感じながら、西前さんのナビゲーターで星野邸へ出発したのは午後6時30分。

西前さんのナビゲーターに従ってフェアバンクスから少し離れた山に向かった。おしゃれなログハウスの家が点々とあり、高級別荘地のようだ。でもみんなよく似ているので自分のいる場所が分からなくなってしまった。つまり迷子状態。また、電話のある所まで戻り場所を確認しての繰り返し。星野邸に着いたのは午後9時であった。奥さんの「直子さん」が笑顔で出迎えてくれた。一人息子の「しょうまくん」は、もうおやすみになっていた。

### 星野道夫さんとの出会い

「遅くなりました。申し訳ございません。」と玄関に入ると、身長が180cmぐらいのがっしりした男が

「ようこそ。おつかれさま」

と風体に似合わない優しい女性的な声で答えてくれた。彼が星野道夫氏だ。

西前さんと星野さんは出版社（福音館書店）の関係と「アラスカ」を題材にしていることから出版社の方の紹介で知り合ったそうだ。食事もせず待っていてくださった星野夫妻と一緒にキャベツがメインの水炊き風ザワークラウトの鍋を作り、みんなで鍋をつつきあい、ビールを飲みながら和気あいあいの雰囲気での会話を楽しんだ。



星野道夫邸



星野道夫氏・西前史郎氏

鍋の準備をしている時、綺麗な女性が星野氏を訪ねてきた。隣に住むアラスカ大学で日本文学の助教授をしているカレン・コリガン＝テイラーさんだそうだ。星野さんから相手をするように仰せ付き、カレンさんが「宮沢賢治生誕100年…」のタイトルがついた本に執筆した文章を読ませていただいた。難しい内容の文章で、更に、今まで見たことのない漢字の熟語（仏教用語だと思われる）が多く使われていた。何度読み返しても意味が理解できないほど難解な文章が書かれていた。冷や汗をかきながら文章を読解しようとしている様子を見て彼女はニコリ笑みを浮かべ「こいつにこれ以上聞いても何も出ないな」と思ったのか「Thank you」と言って帰っていった。

しばらくすると、小学校5～6年生ぐらいの男の子がやってきた。星野さんは真剣に話を聞きアドバイスをしていた。どうも、今日の日曜日に地域でボーリング大会がありその運営や商品についてアドバイスをもらいに来ていたようだ。その対応の真剣さが星野の人柄をよく表していた。

私は、この少年とのやりとりをじっと眺めていた。星野さんは決して子ども扱いをしない。いろいろ話を聞きながら何が一番良いか一緒に考えるようなスタンスをとっていた。子どもに対して、よくありがちな頭から押さえつけるような発言はない。

そして、相談相手の少年が納得した結論に至るまで約1時間、手抜きをせず真剣に相手をする姿に感銘を覚えた。この子どもとの対応が今の私に大きく影響しているし、それに近いことを実践しているつもりだ。

結局、時間が遅くなり、翌日午前5時には星野さんは日本での講演のため出発するというのに家に泊めていただくことになった。そんな状況でも星野さんは私たちを10年来の友のように午前2時ぐらいまでいろいろお話しの手をしてくださった。

星野さんは、これから取り組みたい仕事の一つとして「ワタリガラス」の神話を追っていきたくと語っていた。実はその調査の過程で、ロシア領チュトコ半島に行ったとき、今では失われたアラスカの20年前以上の姿が残っており、生まれて間もない子どもと奥様の直子さん三人で暮らしたいという思いもあったが、残念ながら適した家がなく星野さんは単身で行くことを決めたそうだ。その場所には6月30日に最後の調査へ行き、アラスカに戻ってすぐにカムチャッカ半島へ出発。8月8日に事故に巻き込まれこの世の人ではなくなってしまう。

また、話の中で私の地元での講演会を企画するから来ていただけるかと訪ねたところ、「喜んでいきますよ」とお返事を頂いた。残念ながら、それは叶わぬ夢となってしまった。しかし、9年後、「愛・地球博」で奥様の直子さんにお越し頂いて瀬戸会場市民パビリオンで道夫さんの作品のスライド&トークショーを市民団体「心のアラスカ」主催で開催できた。

### 「子どものための体験活動」を企画・運営するNPO活動

2003年NPO法人の認証を愛知県から取得していよいよ活動となった。その時の設立

メンバーは、愛知青少年公園キャンプカウンセラー「まつぼっくり会」に関わった人たちだ。何人かの学生もそのメンバーとなっていた。法人格を取る以上、目的は社会貢献だが会社と同じで長期に存続していかなくてはいけない。それには、運営費を稼ぐ必要がある。

最初から行政がらみで設立された御用NPO法人とはわけが違う。活動拠点もなく知名度もない。最初の5年は実績づくりのため手弁当で協力していただくようお願いした。最初は私のお店のお客や知人で小学生のお子さんやお孫さんに義理で参加していただき参加人数を確保していた。そのうちイベントの内容の面白さもあり新聞の記事にも取り上げていただけるようになった。そしてリピーターの参加者も増えてきた。

その内容の一例を挙げると、田植えの場合は、田植えだけでなくザリガニ釣りから始まりザリガニ捕りになり泥んこ遊びとなって田植えとなる。当然頭から泥んこになるわけだが、水シャワーで泥を流した後、体を温めるためドラム缶風呂に入るという流れで行う。この非日常性の体験が子どもにとっては心地がよいようだ。

「わくわく体験隊」の子どもと接するときの基本は2つ。「褒める」と「真剣に叱る」である。特に他の人と違ったことをしたり、発見したり、表現したりした時には大げさなぐらい「褒める」のである。「叱る」場合は、自分や他の人に大げさをさせたり、命に関わりそうな悪ふざけをした時だけで、何が悪いのか分かるまで徹底的に行う。その間は決して笑顔を見せない。分かったらギュッと抱きしめてあげる。それだけである。それは、その子にとって自分の存在を認めてもらったことになり、「わくわく体験隊」に自分の居場所があるということが無意識のうちに感じられるよう

だ。その影響かどうかわからないが学級崩壊の要因となっている参加者が1年で学級委員になったことがあった。

2005年ある旅行会社からスキーをメインの体験活動とした「子どもだけのウインターキャンプ」の協働事業のお話をいただく。現地は白馬村観光協会が仕切り、参加者募集・受付など旅行業法に関わる場所は旅行会社、子どもの24時間サポートと雪遊び体験は「わくわく体験隊」という具合にお互いの得意分野を生かし、難しい部分はお願ひするというギブ&テイクでひとつの魅力ある体験ツアーをつくる試みを実現し現在も継続している。

2008年度からは、岩倉市にある青少年研修宿泊施設「希望の家」の業務委託を受け活動拠点ができた。それだけでなく常勤有給職員を2名配置でき事務局としても機能できるようになった。そして、「自然体験

活動指導者養成講座」を行い「わくわく体験隊」で活躍できる人材育成を試みた。2009年度からは指定管理者になる予定で、かなりの権限をもってこの施設を管理・運営することが可能となる。

私にとってNPO活動とは、今まで生きてきた中で色々経験したことや学んだことを、子どもたちやこれから社会人として活躍する学生たちに伝えることで、何かを感じてもらい、そして次の世代にその何かを伝えていくそんな流れの一つのルーツになることである。幸いにして、私は、一般の方より多くの経験や人の繋がりを持つ機会に恵まれた。その伝える結果として社会貢献をすることになれば尚更嬉しい限りである。そして、その流れが末代までもつづき文化となれば、私がこの世に生まれてきた意義があるのかなと漠然と考えるのである。



田植え



ドラム缶風呂

## ■著者プロフィール

杵本幸司（IRIMOTO kouji） 特定非営利活動法人「わくわく体験隊」理事長

### 略歴

- 1977年 愛知工業大学電子工学科入学  
旧愛知青少年公園でキャンプカウンセラーを4年間活動
- 1981年 愛知工業大学電子工学科卒業、山洋電気(株)入社
- 1991年 山洋電気(株)退社、アウトドアライフショップ「ベルナーランド」開業  
商品を売るだけでなくトレッキングやカヌーなどアウトドアスポーツのイベントを行う
- 1996年 マッキンレー冬期初登頂メンバーとアラスカのナショナルトラスト活動に参加  
登山家「西前四朗」、環境及び民族独立運動家「アーサー・デビットソン」、写真家「星野道夫」等と出会
- 1999年 この年より海外ハイキング、トレッキングを実施(スイス、アラスカ、カナディアンロッキーなど)していく
- 2003年 特定非営利法人わくわく体験隊設立  
2002年愛知万博のため青少年公園が閉鎖となり、そこで活動していたキャンプカウンセラー経験者で子どもの主体性を大切にしたい体験活動を企画・運営する。
- 2005年 愛知万博・市民プロジェクト「心のアラスカ」(写真家故星野道夫がテーマ)にトータルアドバイザーとして
- 2006年 環境省・環境カウンセラーに登録
- 2009年 青少年宿泊研修施設を岩倉市「希望の家」の指定管理者となり所長として就任



愛・地球博にて（星野直子さんと）

注：杵本氏は、2009年3月22日に発足した「愛・地球博記念公園（モリコロパーク）公園マネジメント会議」（会長：稲村哲也）のメンバーである。2007年12月に設立された準備会から携わっている。「公園マネジメント会議」は、モリコロパークを拠点として、行政と市民、NPO、大学、企業などが連携して、環境共生、多文化共生など万博の理念を継承する活動を続けていくために、設立された。